

麻しん・風しん予防接種について

病気の説明

（１）麻しん

麻しん（はしか）は、麻しんウイルスの感染によって起こります。感染力が強く、飛沫・接触だけではなく、空気感染もあり、予防接種を受けないでいると、多くの人がかかり、流行する可能性があります。典型的なはしかは、高熱、せき、鼻汁、眼球結膜の充血、めやに、発疹を主症状とします。最初 3～4 日間は 38℃前後の熱で、一時おさまりがけたかと思うと、また、39～40℃の高熱と発疹が出ます。高熱は 3～4 日で解熱し、次第に発疹も消失します。しばらく色素沈着が残ります。

主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者 100 人中、中耳炎は約 7～9 人、肺炎は約 1～6 人に合併します。脳炎は約 1,000 人に 1～2 人の割合で発生がみられます。また、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は、はしか患者約 10 万例に 1～2 例発生します。

はしかは、医療が発達した先進国であっても、かかった人の約 1,000 人に 1 人が死亡するととも重症の病気です。日本でも平成 12 年前後の流行では年間約 20～30 人が死亡していました。世界各地で、はしかは再び増加傾向にあり、途上国を中心に多くの小児がはしかで命を落としています。

（２）風しん

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によって起こります。潜伏期間は 2～3 週間です。典型的な風しんは、軽い風邪症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。年長児や成人では関節炎の頻度が高く、予後は一般に良好ですが、血小板減少性紫斑病や脳炎の合併を認めることがあり、まれに溶血性貧血もみられます。大人になってからかかると重症になります。

妊婦が妊娠 20 週頃までに風しんウイルスに感染すると、先天性風しん症候群と呼ばれる先天性の心臓病、白内障、聴力障害、発育発達遅延などの障害を持った児が生まれる可能性が非常に高くなります。

麻しん風しん混合（MR）ワクチン（生ワクチン）

麻しんウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくった生ワクチンです。

1 歳になったらなるべく早く第 1 期の予防接種を受けるように努めてください。

麻しんワクチンも風しんワクチンも 1 回の接種で 95%以上の子どもは、免疫を得ることができますが、つき損ねた場合の用心と、年数がたつて免疫が下がってくることを防ぐ目的で、2 回目の接種（第 2 期）が行われるようになりました。

麻しん又は風しんのいずれかにかかった方にも、麻しん風しん混合（MR）ワクチンを使用することが可能とされています。

なお、病気の治療、予防などのためガンマグロブリン製剤の注射を受けたことがあるお子さんについての接種時期については、かかりつけ医と相談してください。

副反応について

アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの副反応がまれに生じる可能性もあります。
また、麻しんワクチンを接種した場合、発熱に伴う熱性けいれん（約 300 人に 1 人）を来することがあります。その他、ごくまれに脳炎・脳症（100 万～150 万人に 1 人以下）の報告があります。

接種時期

	標準接種年齢	接種可能年齢	接種回数
第 1 期	1 歳になったらすぐ	1 歳以上 2 歳未満	1 回
第 2 期		5 歳以上 7 歳未満で、 小学校入学の前年度 1 年間	1 回